

講義は遠隔地域で学ぶ

講義はオンラインで実施し、地域を巡りながら学んでもらう大学が誕生している。学生はその土地で暮らしながら様々なプロジェクトに参加。地域ニーズを発掘・創造し社会課題の解決を探る。ネットの通信教育課程を併用し大学卒業資格を取得できる選択肢もある。ポストコロナの新しい学びの形としても注目を集めている。

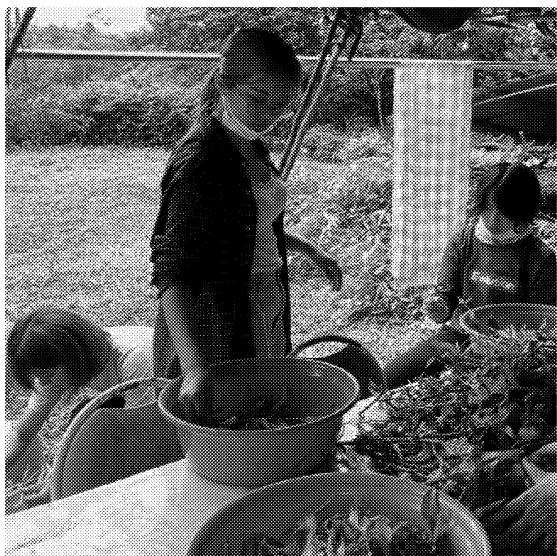
今年4月、アスノオト(東京・千代田、信岡良亮社長)が運営する4年制の「さとのば大学」が発足した。キャンパスはなく、地域を1年ごとに巡り、現地で暮らしながら地域のひとと一緒にプロジェクトに参加して学ぶ。初年度に入学した4人の学生が現在、島根県海士町や岡山県西粟倉村など3カ所の「留学先」で実践的な学習に取り組む。

講義はすべてオンラインで、約15人の専任・特任講師らが担当する。学生は平日午前中はオンライン講義を受け、午後は学習した内

容を基に地域のプロジェクトに参加したり地域の手伝いをしたりする。オンライン講座をベースにしなが

地域での実践活動を通じて、自分なりに問題意識や解決手法を模索していくのが同大学の大きな特徴だ。西粟倉村で学ぶ学生は、地元の小中学生とジビエ肉のレシピを開発し、各地の人たちのキッチンでオンラインでつなぐことで全国から孤食をなくすプロジェクトを実践しているという。

同大学発起人の信岡氏は「これからの社会で求められるのは、新しいプロジェ



地元農家の作業を手伝う学生の姿
大学の受講生(福島県南相馬市)

学生の1週間の過ごし方(例)

	月	火・水・木	金	土	日
午前	メンタリング(さとのば大)	オンライン講義(さとのば大)	プロジェクト(自分の活動)	オンライン講義(通信制大)	
午後	メンタリングやオンライン講義を午後のプロジェクト活動に生かす	オンライン講義(通信制大)	プロジェクト(自分の活動)	オンライン講義(通信制大)	地域の手伝い

自由時間

さとのば大 プロジェクト実践 暮らしの藝術大 110カ所で受け入れ

クトを生み出して実践できる人材」と強調する。学生の受け入れ先は全国各地に10カ所ある。学生は連携する地元企業や自治体のシェアゲストハウスに宿泊し、世話役のメンターによる「メンタリング」を受けながら日々活動に取り組み。来年度入学者の募集を始めており、将来は1学年50人前後、留学先は20〜25地域に増やしたい考えだ。

初年度にかかる費用は80万円前後で国立大学と同程度のイメージ。卒業後の進路は、まちづくりのコンサル会社への就職や地域おこし協力隊への参加といった地方創生に関わる仕事のほか、起業の道も想定する。新型コロナウイルス禍の対応で教育や仕事の領域にもオンラインが普及し、特定の場所に縛られない学び方や働き方も可能になってきた。さとのば大学のよう

通信課程併用し 大卒資格取得も

新潟産業大学の「ネットの大学 managara」は全カリキュラムがオンラインで提供され、通学の必要がなく24時間いつでも

も受講可能だ。必要単位を取れば大卒卒業資格・学号が得られる。金子和裕・学長補佐は「新卒生がメインで、スクーリング(面接授業)がない通信制大学は国内で唯一」と強調する。本人の受講確認のため、アクセスには顔認証が必要。「一区切りごとに小テストする講義もあり、ある意味で通学生より厳しい」と通信教育部長を務める安達明久・特任教授は話す。カリキュラムは同大学の経済学部経済経営学科と同

一。あらかじめ録画された90分の講義をスマートフォンやパソコンで好きなときに受講できる。ただ安達・通信教育部長は「高校新卒生は社会人と違い、諦めやすい傾向がある」と指摘。今後、カウンセラーへの誘導やサポートなどオンライン受講のフォローにも力を入れていくという。

(小田原芳樹)

「意見・情報は電子メール、nikkei04@nex2.nikkei.co.jpへお寄せください。」

許諾番号30085100 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。
2021年11月24日付 日本経済新聞朝刊 015ページ
©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。